

差別と区別の境界線 ① 表裏 上中下 前後 大小 …

差別と区別の意味自体は、よく知るところです。しかしながら、どこまでが差別で、どこからが区別なのかは、難しい判断のこともあります。

「備前・備中・備後」「上越・中越・下越」のように、「前・中・後」や「上・中・下」を使用する地名は今も使われています。「上越新幹線」「肥後銀行」などの名称にも、特に違和感を感じません。これらは言葉は歴史的な旧国名である上に、みんな気にしていない(差別を感じない)という現況に基づきます。

「備前・備中・備後」の地名は、岡山の土地の歴史文化や風土に依ります。岡山県の旧国名は『吉備』です。これは黍(キビ)の収穫量が多かった事に由来すると言われていています。桃太郎のお話に出てくる「吉備団子」は当地の名物として皆知る所です。他の国名を見ても、粟に由来する阿波国や木の国が転じて紀伊国となった例などもあり、吉備=黍も納得です。岡山県内には大きな古墳が数多く造られている事から、吉備国は出雲や大和王権といった日本を代表する勢力に匹敵するような巨大な力を持っていたと考えられています。その後、吉備の国は三つに解体されました。三分割のねらいは、弱体化させて大和王権による支配を安定させる為です。地理的には「前」は東、「中」は中、「後」は西を意味し、吉備の国を分離した際に、『前つ国』『中つ国』『後つ国』と呼んだことから、やがて備前・備中・備後という国名に定着していきました。その後さらなる弱体化を図って備前は二分され、北部は「美作国」となりました。このように漢字や地名には歴史があり、文化や民俗があり、人々の願いが内在します。

時代の流れから、差別・不快用語となった言葉には「表日本・裏日本」があげられます。現在は、太平洋側・日本海側と表記しています。昭和時代には、天気予報でよく使われました。特に雪の降る冬場は、よく耳にしました。しかし、「裏」という言葉には、陽が当たらず暗い重いイメージが付きまといまいます。また「裏稼業」「裏の顔」等の用例では、ダーティでいかげわしい印象を持ちます。雪に閉ざされた現況と相まって、地域住民の中には、嫌な想いをした人々もいたに違いありません。

「大阪」はもともと「小坂(おさか)」の表記・呼び名でしたが、「小」は縁起悪いから「大坂」に変わり、さらに「坂」は「土に返る(=死ぬ)」と読めるので縁起が悪いから「大阪」にしましょう…てな具合です。「大」の地名記述は、室町後期、本願寺中興の祖・蓮如自筆和歌に「大さか」とあるのが文献上の初出です。「坂」については、「土に返る」に加え、明治維新以降は「土(さむらい)が謀反を起こす」と読めるので良くない、という意見が出たりもしました。このような理由で、1868年、正式な地名としても「大阪府」となりました。大阪府が設置されてからも暫くは混用されていましたが、明治10年代には「大阪」が一般的になりました。このように、小坂⇒大坂⇒大阪は、漢字の意味にまつわる改名です。

「裏日本」のような差別・不快とまではきませんが、縁起を担ぐ人々の想いが垣間見られます。

「上方落語」は大阪落語、列車の「上り・下り」は東京基準ですが、当時の集権の場所(昔:大阪・今:東京)が言葉に反映されています。これらは、不快用語ではありません。差別と区別の境界線は、「みんな(多くの人)が、差別や不快を感じるか・否か」がひとつの基準となっています。